早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書（Web 公開用）

申請者（ふりがな）	小口　真奈（おぐち　まな）
所属・資格（※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載）	早稲田大学大学院人間科学研究科 博士後期課程 3 年
発表年月 または事業開催年月	２０２２年１０月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本認知・行動療法学会　第 48 回大会
発表者（※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること）	小口真奈・熊野宏昭
発表題目（※学会発表の場合のみ記載）	大学生 ADHD 傾向者を対象としたシングルケースデザイン研究による先延ばし介入の効果検討

発表の概要と成果（抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。）

成人期にも持続する注意欠如・多動症（ADHD）は，抑うつ症状といった二次障害の併存率が高いことが知られている（Fayyad, 2007; Meinzer et al., 2013）。成人期 ADHD の二次障害に対する有効性が示されてきた認知行動療法では，不注意・衝動性・多動性といった中核症状ではなく，それらの症状を補うことができない結果生じている随伴症状を治療ターゲットとしている（Safren et al., 2004）。成人期 ADHD の随伴症状のうち，先延ばしを最も頻繁に日常生活で経験していることが指摘されており（Ramsay & Rostain, 2007），先延ばしは成人 ADHD の治療における重要な行動目標である（Ramsay, 2020）。しかし，健常者を対象に検討されてきた先延ばし介入が，発達傾向を有する者に有効であるかは検証されていない。そこで，本研究では ADHD 傾向を有する大学生を対象に，先延ばし介入を実施することにより，抑うつ症状の低減，人生満足度の増加がみられるかどうかを検証することを目的とした。その結果，先延ばしや抑うつ症状は減少し，人生満足度は増加するといった改善傾向が示された。また，先延ばし介入に対する満足度は，最大値 32 点と比較し，おおむね満足度が高かった可能性が考えられる。先延ばし指標としては，行動を生起するまでに時間がかかるといった実行の先延ばしや，実際に不利益が生じている非適時性は改善がみられたものの，決断を遅らせてしまう主観的な先延ばしについては悪化傾向がみられた。この結果から，介入前と比較して，課題などに取り組む行動の生起は増えている一方で，取り組むかあるいは遅らせるかといった意思決定には時間が費やされている可能性が考えられる。

※無断転載禁止